九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

李成研著『越境する文学 : 朝鮮児童文学の生成と日本児童文学者による口演童話活動』

中根, 隆行
愛媛大学法文学部人文学科准教授

https://doi.org/10.15017/20349

出版情報：九大日文. 17, pp.82-84, 2011-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

◎書評

金成妍著『越境する文学――朝鮮児童文学の生成と日本児童文学者による口演童話活動』

中根隆行 NAKANE Takayuki

韓国は言うに及ばず、日本の児童文学でさえ不案内な私が評者として相応しいのかどうかはわからないが、そんな立場から率直な感想を言えば、金成妍著『越境する文学――朝鮮児童文学の生成と日本児童文学者による口演童話活動』を読み始めてから、これほど自信に満ちた学術書も珍しいのではないかと感じた。「序」には「植民地期の朝鮮で行われた日本児童文学者による口演童話活動を実証的に研究した初めての試みである」と明記され、「筆者は、当時、植民地期の朝鮮で刊行されていた日本語の新聞と韓国語の新聞をすべて通覧し、その活動の組織的・思想的背景、口演で話された内容の詳細、移動のスケジュール、参加メンバーなどの詳細を明らかにし、この時期の口演活動が朝鮮における児童文学の誕生を促したという結論を得るに至った」と述べられているからである。

なるほど、巌谷小波や久留島武彦、大井冷光らの朝鮮（旧満洲）行の日程詳細に始まり、『京城日報』紙掲載の児童文芸物や京城日報社主宰の「お伽講演会」実施の一覧表、巻末の「日本人による朝鮮口演年譜」にいたるまで、本書所載の表・年譜などの諸資料は膨大かつ詳細で圧倒される。また、副題に記されているとおり、その丹念な資料踏査から裏づけられる「朝鮮児童文学の生成と日本児童文学者による口演童話活動」とが交差することによって織りなす位相も、たんに『オリニ』創刊の背景にとどまらない地平を切り開いたものとなっている。その意味で本書は、この分野における実証的研究として草分け的なものとなるだろう。

ただこう述べてみても門外漢の書評としては体をなさない。よって、ないものねだりになるかもしれないが、やや異なる方向から本書を位置づけてみよう。本書の章立ては「序」に続き、「第一章　朝鮮児童文学の胎動期」「第二章　朝鮮児童文学の生成期」「第三章　朝鮮児童文学の展開期」「終章　朝鮮口演を終えた日本児童文学者が持ち帰った「物語」」となっている。「胎動期」「生成期」「展開期」と端的に区分けされた第三章までの構成からは、朝鮮児童文学の史的展開を体系的に素描しようとするねらいが読みとれる。そこで気になるのが、先述した日韓の児童文学が交差する位相の問題、具体的に言えば朝鮮児童文学の史的展開のなかでの巌谷小波を筆頭とする日本の児童文学者の口演童話活動の位置づけ方である。

まずは本書の内容をまとめておこう。第一章では、先行研究

を踏まえて朝鮮児童文学成立の経緯を略述しながら、李光洙と並び称される詩人であり出版界のアントレプレナーでもあった崔南善の日本留学期と、日露戦後の巌谷小波や久留島武彦らによる博文館のお伽講話会の盛行がピンポイントで重ねられる。そして、一九〇八年の『少年』創刊から一九一〇年代の朝鮮における児童（少年）雑誌の動向と、併合後の朝鮮で開催された巌谷小波や久留島武彦らの口演童話会の詳細が、これまた重ねて論じられる。それに続く第二章では、渡鮮した日本の児童文学者の口演活動を主とする京城日報社の「京日お伽講演会」などを追うとともに、方定煥ら天道教幹部によって発刊された児童文芸雑誌『オリニ』に焦点をあて、朝鮮における「児童」概念の定立や児童文化への眼差しの高まりが検証される。

次に第三章では、「京日コドモ会」から「朝鮮童話普及会」、「朝鮮児童協会」へと続く児童文化関連団体の組織化の変遷や、総計六万人を動員したとされる巌谷小波による「全鮮巡回お伽講演会」を中心に、朝鮮における児童文化運動のありようが明らかにされる。韓国では近代の児童文学の本格的な出発と位置づけられている一九二三年の『オリニ』創刊を、同時期に行われていた宗主国系の児童文化運動の文脈のなかに織り込むことによって、朝鮮における童話普及運動の位相が提示される。また、巌谷小波による口演童話と書記童話それぞれの分析や『毎日申報』での翻訳・翻案掲載のありようも具体的に素描されている。詳しくは論じられないが、ここのところは大変興味深かった。

さて、このようにみればもう諒解できるだろうが、本書の成果は、朝鮮における児童文化運動の実態を巌谷小波らの口演童話活動と宗主国系のメディアとのかかわりから明らかにしたことに求められる。つまり、これまで一国主義的な側面からなされてきた観のある朝鮮における児童文学研究にたいして、そこにたんなる対抗の構図だけではない、日本のそれとの影響受容関係を組み入れたということになる。ただ、この影響受容関係というのは、比較文学の出所来歴を踏まえると厄介な代物である。いうまでもなく、それは上位から下位へという力学的構図によって成り立つ関係であり、ややもすれば宗主国文化から植民地文化へという短絡化を助長することにもなりかねないからである。

けれども、この点が気になったところというわけではない。本書では、朝鮮から帰還後の久留島武彦が「虎の胃袋学校」など朝鮮の虎をモチーフにした童話を断続的に発表していることを論じた終章など、影響受容関係に還元されない箇所もあり、著者もこのような力学的構図の罠を承知しているであろうことは察せられる。だが、そうだからこそというべきか、全体的にみて硬い分析という印象が残る。日本と朝鮮の児童文化運動をそれぞれ章内に併記して論じる構成はともかく、やや粗削りな推論部分もあり、必ずしもそれらが有機的に連環しているとは言い難いからである。そこで再び、本書の問題提起に戻ろう。

朝鮮で行われた日本人の口演活動は極めて重要な意味をもっていたと考えられ、そうした口演活動の役割を検証しな

ければ、約一〇年後に胎動する朝鮮児童文学の成立に関する全体像を把握することはできないのである。（序）

口演童話を中心に朝鮮で発行されていた新聞雑誌を綿密に踏査して児童文化運動の実態を明らかにした実証的研究。ここに本書の学術的価値はあるのだろう。しかし、その目的は「朝鮮児童文学の成立に関する全体像を把握する」ことであるものの、おもにそれは巌谷小波らの朝鮮における活動に代表される宗主国系の児童文化運動というピースを、朝鮮児童文学研究のこれまで顧みられることのなかった空白として埋めることに設定されている。だが、大切なのは、それらの空白を埋めたあとで朝鮮児童文学の成立をどう論じるかである。

たとえば、「児童」という概念が一九二〇年代に定着した経緯については論じられているのだが、朝鮮における「児童」観が「少年思想」（崔南善）から「「幼い男女」の独自の価値を唱える」「児童解放論」（金小春）に向かうとしても、その定立の根拠はそれぞれの資料への言及と「子どもの日」の設立などの社会的側面に求められている。実証的な作業としてはこれで納得できるのだが、「児童」が旧弊より解放されたから「児童」概念が定立したのだろうか。ジェンダー・システムはどう機能したのだろうか。むろん、これは「少年」「児童」「子ども」といった子どものイメージのパラダイム・シフトであるのだが、その内実は実証作業に加えて理論的に掘り下げる必要があるのではないか。儒教道徳とは異質な「人乃天思想」と児童文化運動との連携は、抗日運動との関係性を含めて、朝鮮独自の「児童」概念の誕生に大きくかかわっている。ならばそこに、いかに宗主国系の児童文化運動が転用されたのか、またそれが文学テクストにどのような痕跡を残しているのかといった点こそより柔軟に追究しなければならないのではないか。

本書の表題は「越境の文学」である。「越境」という語は近年でもよく見かけるが、何がどこからどこへ横断し、どう変わったのかを考えると、本書はまだその内実を描き切れていないように思われる。もとより、これは本書で明らかにされた成果の課題であり、著者の今後の研究に期待したい。ないものねだりの読後感ではあるが、それを望みたくなるような研究の基盤を本書は提示したのだから。

（二〇一〇年三月　花書院　三〇一頁　二六六〇円＋税）

（愛媛大学法文学部人文学科准教授）